



営農NEWS



バレイショ種イモの播種までの管理について

1 バレイショの種イモが届いたら、保管に注意してください

種イモを入手したら速やかに開封し、イモを拵げて通気をよくしてください。傷み（シミ）や腐敗したイモは、取り除いてください。保管温度は2～5℃くらいがよく、日陰の涼しい乾燥した場所で、高く積み上げないように保管します。なお、0℃以下に長時間遭遇したり、高温にさらすことや通気の悪いビニール等で覆うことは避けてください。また、種イモの合格証票は、事故処理時に必要となりますので、大切に保管してください。

2 種イモの消毒を行いましょ

植付前に種イモ消毒を行うことにより、種子伝染病害の黒あざ病やそうか病を防除します。なお、種イモの消毒は、出きるだけ未萌芽のうちに行いましょ。薬剤により、萌芽後や種イモ切断後の処理で薬害の発生する場合があります。薬剤処理は下記を参考に行ってください。なお、各薬剤とも植付前の処理回数は、いずれか1回までです。（農薬の登録状況は平成26年1月23日現在）。

1) 黒あざ病の防除

- ① リゾレックス水和剤の50～100倍液に、種イモを10分間以内で浸漬します。または
- ② モンセレン粉剤DLを種イモ重量の0.5%量を粉衣します。または
- ③ バリダシン液剤5の200倍液に、種イモを瞬時～10分間浸漬します。または
- ④ バリダシン液剤5の200倍液を、種イモに散布します。または
- ⑤ バリダシン粉剤DLを種イモ重量の0.3%量を粉衣します。

2) そうか病の防除

- ① カセット水和剤の30倍液に、種イモを瞬間浸漬します。または
 - ② アグリマイシンー100の40～100倍液に、種イモを5～10秒間浸漬します。または
 - ③ アタッキン水和剤の40～60倍液に、種イモを5～10秒間浸漬します。または
 - ④ アグリマイシンー100の40～100倍液を、種イモ100kgあたり2.5～3ℓ散布します。または
 - ⑤ アタッキン水和剤の40倍液を、種イモ100kgあたり2.5～3ℓ散布します。
- ※種イモに直接散布する場合は、イモは床などに広げて、全体が均一にぬれるよう丁寧に散布してください。

3 浴光催芽を行いましょ

丈夫な芽を出し初期生育を揃えるために、浴光催芽を行いましょ。手順は、

- ① 植付3～4週間前（品種や気温により若干の差があります）から、湿気のない庭先や倉庫の窓際、ハウス内などで、コンテナを利用したり床に直接、種イモを薄く並べて（3段くらいまで）浴光催芽を開始します。床が地面の場合は、シート等を敷いて行いましょ。
- ② 催芽温度は日中10～20℃くらいで、出来るだけ外気温に合わせるために施設内では十分換気を行い、20℃以上の高温は避けましょ。25℃以上になると、障害が発生する場合があります。また、夜間は凍結しないように注意してください。
- ③ 催芽期間中に週1回程度は、並べた上下を入れ替えて、均一に光をあてます。萌芽は5mmくらいを目安にします。

4 畑の準備作業を行いましょ

バレイショの連作は、収量、品質ともに低下しますので、出きれば3～4年間バレイショの作付けがない圃場を選びましょ。土壌酸度は微酸性が良く、中性～アルカリ性の場合は、そうか病の発生が多くなるので注意しましょ。圃場の耕起は10日前までに、完熟堆肥を全面に散布して、出きるだけ深く行いましょ。

5 適切な大きさの種イモに調整しましょ

育芽がすんだ種イモは、芽が2～3個ついて重さ30～60g程度になるよう調整します。1個が60g未満のものは切らずに丸植えし、60～120gは2つ切り、120g以上は3つ切り以上とします。なお、切断は原則、頂部から基部にタテ切りします。切断後は、ゴザ等で覆って2～3日置き、切り口をコルク化させてください。

農薬を使用する際には、ラベルに記載の登録内容、使用法、注意事項などを確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040